

千葉師範学校における、佐原マラソンの研究

A Study of Sawara Marathon at Chiba Normal School

島田良吉

Ryokichi Shimada

角田清隆*

Kiyotaka Tsunoda

はじめに

10年1昔という言葉は、既に過去のものとなった。今日の社会環境の変化は、まことにめまぐるしいものがある。この環境の変化を、体育、スポーツの側面よりとらえると、次のようである。

(1) 機械文明の発達による、現代人の身体運動不足という現象は、体力の低下と共に、現代人の健康を脅かしている。

(2) 社会機構の複雑さ、情報の洪水、科学技術の進歩は、生活や仕事の上で、精神的緊張を余儀なくし、疲労の蓄積を強いつつある。

(3) 個人主義思想の拡大、浸透に伴う、核家族化や人口の流動性という現象は、社会連帯性を失せつつある。

以上の半健康的社会現象に対応し、登場を要請されるのが、体育、スポーツの振興、普及である。学校においては、指導要領改訂に伴う、体育授業時間の増加を促し、社会においては、社会体育思潮のたいとう、即ち、1億総スポーツや国民皆スポーツ及び歩け歩け運動の合言葉を生み、1日1時間運動の提唱となって現れてきた。

ところで体育運動中最も根源的、普遍的、素朴的な運動は、歩(歩)運動である。人間の身体は自動車にたとえることが出来る。即ち、内臓がエンジンであり、手足は車輪である。手足と内臓とは、相関関係が強く、内臓の丈夫な人は足も強く速いというふうに、器管と機能との間に密接な、相関関係がある。従って、歩く(走る)という運動を適度に行なうことは、全身運動であり、体力を高めるのに最も適当、且つ健康を保持、増進に好適な運動であるということは、既に科学的に究明済である。このように、歩(走)運動は心身修練運動としての価値が極めて高いため、競歩大会、持久走、国民皆走大会、及び各種駅伝大会という形で社会の中に位置を占めているが、社会生活の中で、将来学校教育活動の中で、その占める位置、取り上げられ方が過少評価の域を出ないように思われる。

ここにおいて、競歩、マラソンの心身に及ぼす価値を認めて、且つて千葉師範学校では、佐原マラソン大会という学校行事があり、千葉市立梶の同校校庭より、国鉄佐原駅前まで約60kmを、学校長、教職員、学生、生徒の全員が参加し、走破したという事実、現代子にとっては、驚天動地ともいえる事柄である。かくの如き、気概、エネルギーが、教職の世界又は、現代社会を支えている、中心的支柱として承認されるとき、このような行事の持つ社会的、教育的意義を再検討し、再認識する必要の時にきていると思う。出来得ればこのような行事を再現したい熱情にかれる次第である。しかしながらこの画期的ともいえる行事の全貌を伝える文献が存在しないのは、甚だ残念という外はない。創始者(学校長)の氏名も単に実際参加した、教職員、学生、生徒の脳裏に過去の若き日の思い出として残っているものの後世に、その輝しき全容を伝える文献として、千葉師範学校の辿った、歴史的行事として、残し度いという願望か

* 立川市立第一小学校

ら、他の一つは現代の人々がこの事実を正しく評価して、今後の社会的、教育的精神の中に融合して貰いたいという感概を返めて、この研究をとりあげた。

I 調査の方法

佐原マラソンの概要を知るために、その競技要項等について明らかにしていくわけであるが、当時の社会状況のため、資料が保存されていない。従って調査項目を設定して、調査を行なわなければならない。項目を設定という点においては、現在行なわれている、「中日福井マラソン大会」の要項を参考にした。この要項で参考にした項目は次のようである。

- ① 期 日
- ② コース
- ③ 参加資格(健康状態等)
- ④ 競技規則
- ⑤ 表 彰
- ⑥ 開会式、閉会式
- ⑦ 健康診断

又調査項目を決定するには、大まかな骨組というものを知っていなければならない、そこで、この競技に実際に参加した3人の方々に面接し、御意見を伺って、項目を決定した。決定した調査項目と内容は次のようである。

- ① 期日 昭和 年 月 日
出発時間 時
- ② コース スタート地点
ゴール地点
距離 里(km)
- ③ 参加状況 各年度における、教職員、学生、生徒の参加数、及び不参加数
- ④ 競技規則 プログラムの有無、又は保存の有無
- ⑤ 開会式、閉会式の有無
- ⑥ 健康診断の有無
- ⑦ 表彰 表彰の有無と内容
- ⑧ 記録 個人記録、優勝記録
- ⑨ 制限時間 制限時間の有無とその時間
- ⑩ 道路の状況、交通量
- ⑪ 競技運営役員の構成
- ⑫ 事故 事故の具体例、防止策
- ⑬ スタート スタート方法
- ⑭ 食事 食事の内容と時間
- ⑮ 関門 関門の有無と場所
- ⑯ 到着後の帰業方法
- ⑰ 服 装
- ⑱ 大会のエピソード
- ⑲ 太田章一校長(実施時の校長)について
- ⑳ 現在この競技を実施するとしたならば、考えなければならない事柄について現在にい

たって

② このマラソンの意義を、どう評価するか

以上の項目につき、アンケートという形で、千葉師範学校の卒業生 100 名(卒業生名簿により参加年度を考慮して抽出した)に送付し返答を求めた。アンケートの回収部数は約 60 部でこれを参加年度別に区分すると、次の通りである。

昭和 15 年	21 名
" 16 "	26 "
" 17 "	36 "
" 18 "	28 "
" 19 "	2 "

上記数字は、のべ人数であり、1 人で 15 年から 18 年まで参加した人もいる。19 年は、成田、玄鼻千葉師範学校グラウンド間往復なので参考程度にとどめておくことにする。次に回収した、アンケートを、もとに要項を項目別にまとめていく。

II 調査のまとめ

個人あてに出した、アンケートを回収し、記録、期日、コース等については、最大公約数的にまとめ、その他については、できるだけ、正確に当時の模様を知ることが、できるように調査のまとめを行なう。

数字的なものは、当時記録証(写真参照、参加者全員に与えられた)により部分的ではあるが、正確な数字として、とらえられた。以下項目別にまとめると次のことがいえる。

(1) 期 日

昭和 14 年 8 月、太田章一校長(山梨師範学校)が千葉師範学校長となり、翌昭和 15 年よりマラソンを始める。「佐原マラソン」という名称については、当時は 16 里マラソン(距離の関係から)又は、佐原マラソンといわれていた。佐原とは到着地である。以後、太田校長在任中 4 年間実施された。(太田校長は昭和 18 年 4 月、山形師範学校長に任ぜられた。昭和 19 年は、千葉、成田間往復行軍となる。)実施期日は、特定の日とせず、大寒に近い、満月の夜、午前零時出発時刻とした。実施期日は次のようである。

第 1 回	昭和 15 年 1 月 26 日
" 2 "	" 16 年 2 月 9 日
" 3 "	" 17 年 1 月 31 日
" 4 "	" 18 年 1 月 30 日
(参, " 5 ")	" 19 年 2 月 11 日

期日については、当時の記録証を保存している卒業生より、拝借して写真にしたので、正確である。実施期日を大寒の満月の午前零時を選んだ理由について考察するに、当時は、日支事変の酣、太平洋戦争の前年より、戦中に当る、軍国主義、国粹主義、全体主義時代の真只中の時代であり、このような社会状況の影響を最も強く受けた、決戦下の教育体制に突入した時代であった。ために、尽忠奉国の精神と戦闘力としての強靱なる国民体位、体力の向上が国家の至上命令であった。昭和 15 年には、国民体力法が公布され、'体力の国家管理が次々と進められた時代であった。このような状況下では、マラソンは、絶好の体育教材であったわけである。マラソンの最適温度とされているのは、10°~15°C であるので時期的にみると 11 月、4 月、10 月という順になる。大寒の夜となると気温は氷点下になり、明け方となるとその厳しさは一段

と強かったと思われる。条件を厳しくするということは、心身の鍛練には欠くことの出来ない条件である。夜間に走るということは、暗くて道路が見えないという障害がある。そこで満月の夜を選んだ理由が理解される。又零時スタートの理由として考えられることは、(記録、距離の項とも関係あるのだから)一つには、ゴールして帰る汽車の時刻に一致する。次には、到着時刻がそのまま記録になる利点がある。交通量も関係して来るが当時は昼でも危険がなかった。

(2) コース

スタート地点は玄鼻山の千葉師範学校校庭であり、ゴール地点は、佐原駅前(金田屋旅館前)

コース参考図(太線がコース)



コースは地図により明かなように、千葉師範学校グラウンド—千葉市内—神門—佐倉市内—酒々井—成田市内—神崎—佐原駅前である。距離は、このマラソンが別名 16 里マラソンといわれているように 16 里、約 64km であるが、実際は、これより僅かに短いようである。(現代のような、正確に測定した、公認コースでないのではやむを得ない。)このコースが選ばれた理由としては、一つには、高低差が少く、標高もせいぜい 30m 位である。次には、佐倉からは、国鉄総武本線に沿っている。従って途中で落伍しても、鉄道を利用して帰業出来る。更に大体等間隔に、集落、市街地がある等が考えられる。

(3) 参加状況

太田校長以下全校学生、生徒、教職員の参加が原則であり、事務職員も参加している程で、校長を先頭にした全校あげての行事であった。校長の統率力の程が良くうかがえる次第である。

参加数	昭和 15 年	410 名
	" 16 "	453 "
	" 17 "	442 "
	" 18 "	512 "

この数は学生、生徒の数である。これに、教職員約 30 名、その他が加わる。又マラソンの金栗四三氏が毎年特別参加している点が注目される。不参加の数は、明確ではないが、医師の診断書を添えて届け出る制度をとっていた。校長は当時 56 才～59 才であったが率先して参加した、ため他の教職員も参加せざるを得なかったようである。専攻科生、附属小学校高等科の生徒も参加している。

(4) 競技規則

公文書的な競技規則というものは、なかった。競技実施に先立って、コース、注意事項等については、体育授業等で説明を行ない、個人計画を立てさせた。全員参加、全員完走を目標として、細い競技規則に触れていないのは、このマラソンの特徴であろう。その理由として挙げると 1 つには、太田校長の人柄、教育観によるものと思う。余りにも微に入り細い互るような人には大きなことは出来ないようである。次に時代的背景である。所謂戦時下の教育であり、心身の鍛練主義時代であったので、現代のマラソン大会の運営、競技規則のようなものは不要であった。更に交通事情が異り、交通事故対策も必要がなかった、ためと思われる。佐原マラソンが伝統的に行なわれて来た競技ならば、競技規則、記録等について、明文化されたものがあつたであろうが、始めて僅かに 4 年間で終わってしまったので、その点が残念である。このような、大競技会を行なう場合には、主旨、方法等について、細部にわたり、明示する必要があるのでは、ないかと思われる。

(5) 開会式

午後 11 時 30 分校庭に、朝礼体形に並び、スタートに先立ち、校長の訓話、体育教官の諸注意を受ける。校庭には、赤々とたき火がたかれ、これで暖をとった。

(6) 閉会式

競技会当日は、佐原駅前解散、翌日全員登校させ、講堂で表彰式を兼ねて閉会式を行った。このようなマラソン大会の翌日を登校日としたのは、「どのぐらい出席するか知るためである」という校長の言葉が示すとおり、体力、精神力養成という目標がマラソン参加だけでは、達成されないという考えがあつたためだろうか。出席をとり、授業を行なわず下校となったが、翌日の登校には、不満があつた。足中、豆だらけで、歩行、動作に非常に困難であつた、ためである。

(7) 健康診断

佐原マラソン実施にあたっての健康診断は、集団的には、行なわれていない。身体的理由により参加出来ないと思うものは、医師の診断書を提出し、認められたときは、欠席となった。参加しないものは、10 名前後であつたと記憶するものが多い。このようなマラソンにおいて大切な健康診断が集団的に行なわれていないということについて考察するに、その理由として、1 つには、入学時に厳しい身体検査、体力測定を行ない、身体の強健なものを入学させた。他は、毎学期に一度行なわれていた。1000m、その他の競技により、走ることに對し、精

神的、肉体的な抵抗が少かったといっている。

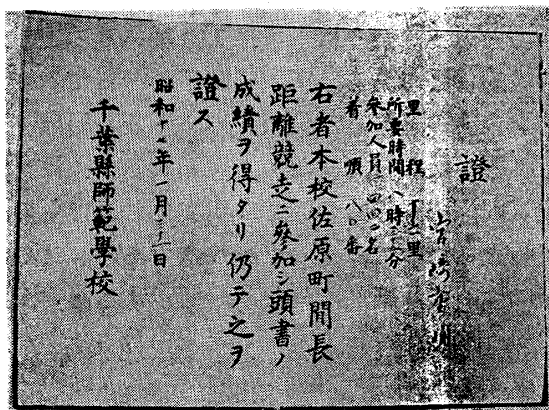
(8) 表彰

賞状についてであるが、上位入賞者に送られたという予想を立てたのであるが、実際に、上位入賞者は、これを受けていない。到着順位を学級毎に集計して、学校全体の中での学級順位を決めたという記憶を持つ人が多かった。しかし、賞状については、実際に保存している人がいないので不明確である。

次にメダルであるが上位入賞者に、おくられた。何位くらいまでに、メダルがおくられたかは、年度によって異っているようだ。10位、50位、60位等さまざまであるが62位で実際に、メダルを持っている人がある。このメダルは師範の養気会の特製メダルであり、18年頃になると在庫が少なくなった。(写真参照)



更に記録証であるが、制限時間内に到着した者には、全員に授与された。次の写真で明かなように、それは「証」である。里程、所要時間、参加人員数、着順、日付が記入されている。(写真参照)現在も、メダルとともに、この「証」を持っている人が多い。この証によっても、わかるように、佐原マラソンの名称は、正式には、「本校佐原町間長距離競走」という、名称であった。



(9) 記録

各年度の優勝記録は、下記のとおりである。

昭和15年	6時間30分	(清水正徳)
" 16 "	5時間58分	(伊藤 正)
" 17 "	6時間15分	(王 文 増)
" 18 "	6時間28分	

参 考 記 録

① 上位入賞記録と順位

昭和15年	8時間21分	16位
" 16年	7時間21分	17位
" 17年	7時間22分	22位
" 18年	7時間52分	62位

② 後半到着したものの記録と順位

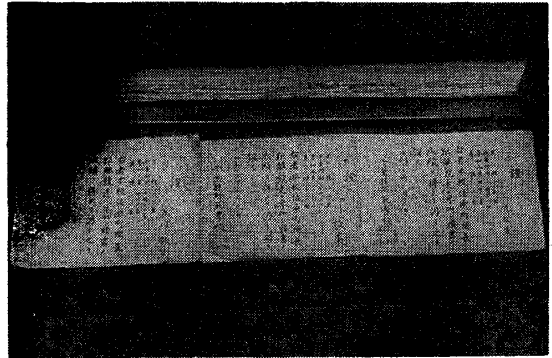
昭和15年	12時間54分	320位
" 16年	10時間26分	289位
" 17年	9時間22分	193位
" 18年	9時間42分	252位

これらの記録については、個人の記憶をもとにしたもの、証として残っているものを、もとにしたもの等を参考にした。この記録については、例えば、昭和16年の優勝記録であるが、ランナーが佐原に到着したとき、記録員が居らず、駅の時計を見て、ランナー自身が6時間と届けたそうである。証には、5時間58分となっている。従って記録は、±2～3分位の誤差が

あるようだ。優勝者は、ほとんど、走りどろしであり、時速約10kmで走ったことになる。参考記録①と②については、これによって中間走者の時間がはかるであろうと、思われたので記載した。

(10) 制限時間

記録所、汽車の関係から、何時迄に到達しないものは、落伍と、みなす、という制限時間を設定してあるものと思われるが、これについては、12時間とするものと、15時間とするものが居るが、昭和15年、12時間54分で320位という記録が残っているから、15時間であったようだ。この時間を過ぎて到達したものは、失格とみなされた。しかし、全員完走ということを目指しているので、時間には、こだわったことはしていないようで。64kmを15時間で走るとすると、平均速度は、4.2kmであり、これは、歩いて行っても、間に合う時間である。



昭和15年の第1回大会の時は、到達しなかったものが、かなり居ったようである。これは、この競技の概要が、つかめていなかったことによるとと思われる。このような競技会には、中間地点の時間も計測できると良い参考になると思う。

(11) 道路状況(交通状況)

千葉市内、成田市内といった市街地を除いては殆ど舗装していない、砂利道であった。このため、だいぶ走りにくかったようである。道路の分岐点には、石灰で矢印を書き、道しるべとした。冬期の夜間のため、道路の一部は、凍りつき、走りにくかった。当時は、今に比べ、車の絶対数が比較にならないほど少なかったもので、昼間になっても、交通が、それ程激しくない。夜間は、殆どといってよい程、車は通なかったもので、この点は、非常に条件が、ととのっていたわけである。

(12) 競技運営役員の構成

創始者、太田校長を中心に、体育科教官(三柳將雄氏が主として計画した)が計画に参加し、運営した。同時に、いづれも、参加者であるため、競技実施中は、運営役員とは、なり得ない。スターターは、体育の教官がなり、ゴールの記録係には、不参加の音楽の先生等があたった。実施中、運営役員が居ないということは、不正、事故に対する処理が不可能ということであるが、この点が、佐原マラソンの特徴であったともいえる。卒業生の協力が、コースの途中の各所にあり、補助的役割を果たした。

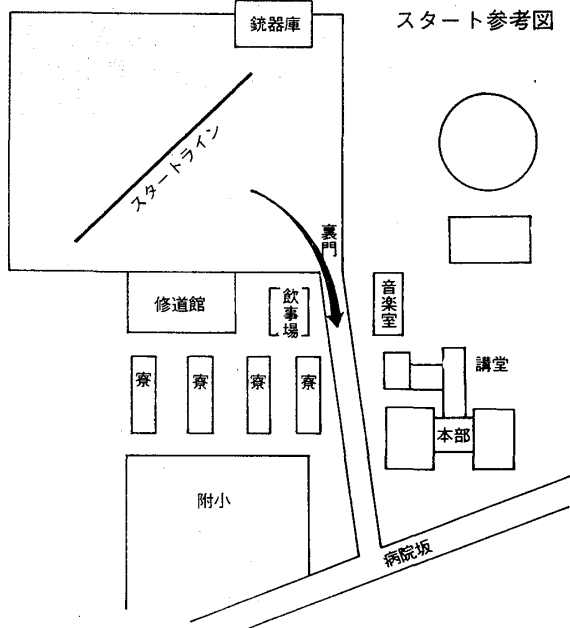
(13) 事故について

60部のアンケートの中にも、面接した方々の言葉にも、身体的事故名は、出てこなかった。走り終わったら、足の裏一面に、豆ができていたというくらいである。事前の健康診断で届け出制という方法を取り、事故防止等も、必ずしも十分でなかったにもかかわらず、事故が起らなかった、ということの原因について考察すると、次のことが考えられる。

- ① 十分な練習を行ない。十分な体力を付けていた。
- ② 気力、精神力が充実していた。
- ③ 時間をかけても、完走するということを目指とした。
- ④ 身体強健者を入学試験で合格させた。
- ⑤ 交通事情が悪化していなかった。

(14) スタートについて

午後 11 時 30 分グラウンドに、朝礼の体形で集合し、開会式を行なった後、点呼をとり、午前零時、出発の合図により、一斉に裏門より、スタートした。出発の合図については、鐘、鈴、太鼓、ピストルという、4 種類があげられたが、各年度により、異った、ために、このような結果になったと思われる。400 数十名がワーという歓声と、ともに、裏門に殺到したため、非常な混雑ぶりであった。



(15) 食事について

早くゴールについても 6 時間、遅い人は 10 時間かかるので、途中で食事を摂らなければならなかった。歩き乍ら食べる者、道路に腰をおろして食べる者様々であるが、各自好きな時に摂ったようだ。持参したものとしては、餅、おにぎり、弁当、パン、密柑、飴等があげられた。途中で湯茶の接待があり、冷えた体の中に暖かいものが入り、再び元気を、とりもどして走り続ける。ここで長時間休んで行く者もいた様であった。

第 1 回目は初めての経験なので、色々と持参したようであるが、上位完走者は、2 回目より何も持っていかなかったようだ。

駅前の金田屋旅館で食事がとれ、駅前の食堂も昼近くなると開店して、食物を持たずとも、良かった。食事は風呂敷につつみ、肩から、「たすき」掛けにして持って行ったり。ポケットの中に入れて行った。

(16) 途中の関門について

途中の関門については、ほとんどの人がアンケートの答が「特に無し」であった。途中 1～2 ケ所に監視員がいて、手にインクでチェックした、とする人の外、道路のわかりにくいところに監視員、OB が居ったという人がある。関門とは、正しい通過の確認を行なうところであるが、この意味での関門は、なかったようである。道路の分岐点には、石灰で方向が示してあり、不正は、お互に戒めていたので関門のチェックは不必要であったのかも知れない。佐倉、成田、酒々井等においては、地元小学校の職員、OB が、たき火をして、湯茶の接待を行なった。

地理に詳しい者の中には、近道をしたり、乗りものを利用する者もいたようだが、これら不正は問題とされなかった。又不正をして逆に迷う者もいたようであった。

(17) ゴール後の帰着について

佐原駅前に到着し、記録係に、学年、科、氏名、記録、順位を記録して貰い、食事をとったり、休息をしたりした後、自由に汽車に乗る。疲れた体を車内に横たえる者、通路にすわり込む者、その姿は、皆一様に疲労の色が濃厚であった。車窓からは、まだ走り続ける友の姿が見え、これを激励する。千葉駅に着き、寮に帰る者、自宅に帰る者、階段では、皆足を引きずり、普通ならば 15 分の寮への道のりも 1 時間以上もかかった。千葉駅にリヤカーで迎えに来て貰う生徒も居たようだ。

足の痛みは一週間程残り、特に階段の登り下りや、腰を降す時などは、ひどい痛を伴った。汽車の切符は、各自購入した。

(18) 服装について

服装については、学帽以外は規定がなく、まったく自由であった。第1回大会のときは全員が未経験であった、ために、色々の服装が現れた。大寒であったので、防寒ということに、重点がおかれ、制服、オーバー、襟巻、マスクを着けて走り、その重さで、ダウンしたという話もあった。その他、トレパン、トレシャツに運動靴という、軽装もあったが数は少なかった。第2回大会よりは、前の経験を生かし、走り易いようにということに重点がおかれた。(写真参照)



(昭和19年卒の佐久間氏提供、昭和17年度佐原マラソン出発前の様子)

履物も編上靴、下駄等はじめは見られたが、次第に、草履、運動靴が増えた。マラソン、スタイルというのは、少く2〜3名であったが次第にこれも増していった。服装についても各自がいろいろな工夫が見られた。その例は、草履である。藁だけの弱いので、布を入れて、補強し、豆ができないように、石けんの粉をぬり、より速く走れるようにした。

(19) 大会のエピソードについて

個人的なものが多く、実施要領とは、かけ離れたものであるが、佐原マラソンの裏話として、概要の把握に役立つものと思われる。箇条書にすると次のようである。

① 第1回大会では、様子が、つかめないうえ、防寒対策を過ぎ、途中服の重みに、耐え切れずダウンするもの、下駄で参加したもの、食糧を多量に持ち過ぎ途中で捨てたものを等様な光景が見られた。

② マラソンの金栗四三氏が特別参加、第1回大会では1着と同時に、ゴールイン、以後続けて参加している。

③ 満州国留学生、王文増氏祖国のために頑張る(昭和17年)。

④ コースの途中にある竹垣の竹を引き抜いて、舟をこぐようにして、歩いてゴールに向う者が多く居た。

⑤ 15才から26才までの年令。附小の高等科の生徒が自主参加し、25〜26才の専攻科生も一緒に走る。

⑥ 小便が道しるべとなる。明け方になると道路に幾筋も跡が残る、これが紙屑、密柑の皮も、ともに道しるべの役割を果たす。

⑦ キセル歩行をしたという話。監視員のいないことを幸いに、佐倉より京成電車一番で成田まで行き、成田より佐原まで、マラソンで行ったという要領の良い者も居た。

⑧ 酒で暖をとり走る専攻科生。水筒に酒を入れて、途中で一杯やりながら走った。専攻科生がいたとの話。防寒には好適だった由。

以上素朴な佐原マラソンの様子をうかがうことが出来る。

(20) 太田校長の略歴について

氏名 太 田 章 一

明治 18 年 広島県に生る。

〃 43 年 東京高等師範学校本科博物科卒業。高知、富山、福岡各県の教諭、校長を歴任。

昭和 7 年 山梨県師範学校校長となる。

〃 10 年 講道館柔道 4 段に列せらる。

〃 14 年 千葉県師範学校校長となる。

〃 18 年 山形県師範学校校長となる。

(註) 山梨県師範学校部時代、上諏訪マラソンを創始する。(山梨師範グラウンドより、上諏訪まで、17 里を、大寒に近い、満月の夜出発で、走破するというもので、佐原マラソンの原型とも、いうべきものである。)

(21) 太田校長の人となりについて

質実剛健、吉武士の風格をもっていた。老境に入ろうとする年令だったが、身体的鍛練を続け、青年のような、客気をもっていた。以上が卒業生の一致した印象であった。その人となりについては、次のような事柄で或程度理解出来ると思う。即ち、昼食に費す時間は、大きい、この時間を活用すれば、大きな仕事出来るとする、2 食主義者であった。又外套、手袋の緊止を行なう。或は、クラス対抗のボート競技会の開催、すもう部の新設を行なう。将又、式典には、大礼服を着用せずに、モーニングですます等。

昭和 14 年着任して以来毎学期 1 回の 1000m 競走と佐原マラソンを始め、自らも率先して、これに参加した。実行力の秀れた教育者であった。又柔道の有段者であり、体育に関しては、非常に感心が深かった。対外競技を復活させたのも太田校長である。(佐原マラソンは、太田校長の在任中 4 年間にわたり、実施されたが、校長が山形師範学校に転任となった、翌年より、千葉、成田間往復行軍という競技になった)。

(22) 現在の教育学部学生を対象として、この競技を実施出来るか、という、アンケートに対し、大部分が「不可能」という意見であった。その理由は、次のようである。

① 交通事情が全く当時と異り、事故が、発生するであろう。

② 現在の学生の体力、気力がこのマラソンに耐えるかどうかの疑問ある。

③ 今の学生がこのような、競技の意義を理解し、参加しようとする意志を持っているかどうか疑問だ。

④ 現在の社会的世論が、これを受入れるかの疑問。

⑤ 教育体制上、事故等が起きた場合、問題になるだろう。

(23) 現在に、いたって、このマラソンの意義をどのように考え、評価しているか。このアンケートに対し、有意義であった、という意見が圧倒的に多かった点が注目される。それは、このマラソンを完走(歩)する中に、自己の体力、精神力の養成という、有効な結果を見出し、それが現実の生活の中に、生きているためである。体力、精神力の養成は、佐原マラソンに参加することによってのみ行なわれるのではなく、他の、毎学期、毎月、毎週実施されている、練習、競技会等が基礎となっていることが語られている。又全校生徒、教職員が、このような、同一体験の中で、各自の限界を知り、極限状態を、突き抜けることにより、底深い、永続的な人間関係が、作り出すことが、できたという意見が大部あったことを銘記したい。

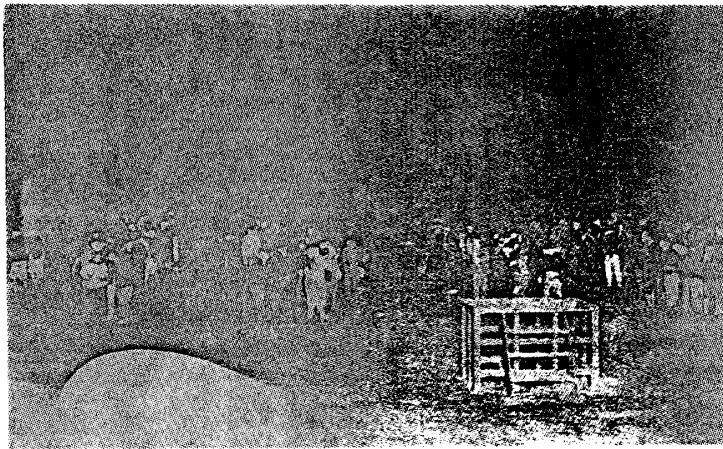
当時の新聞記事より

① 校庭に集合



服装がよくわかる

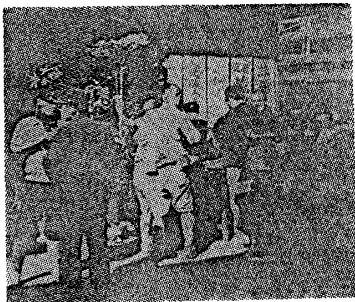
② スタート前



学級ごとに集合

③ ゴールでの記録風景

金田屋旅館前



④ 新聞記事



お わ り に

文明生活は、必ずしも、身体的、精神的、社会的に健全なる方向を、とるとは限らない。勢の、おもむくところ、華美にして、柔弱な方向を、とるように思われる。現代は、その最たるものではないかと思う。人間の幸福とは何ぞや、という原点に立って、考える時が来ているように思えてならない。人間を幸福にする万能薬はない、又一个の考え、一つの方法で解決出来るものもない。又良いと考えることが、総て良い結果を生むとも、悪いと考えることが、総て悪い結果を生むとも限らない。健全で、しかも雄々しく、逞しい文化の方各にスイッチを切り変える一つの資料ともなれば幸いと思い、この小論をおくる。